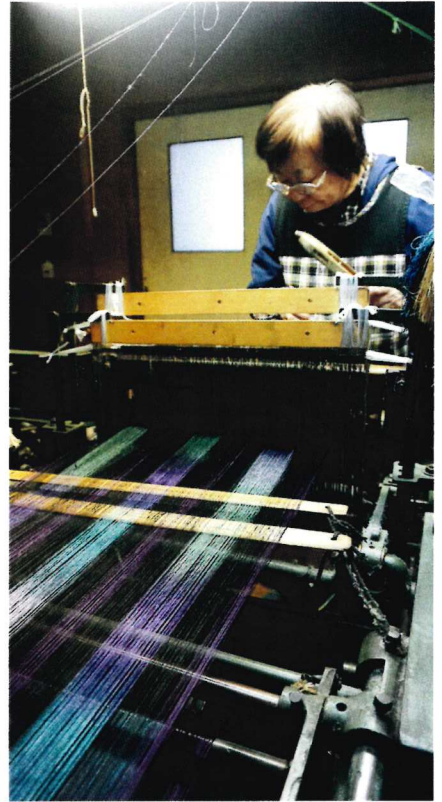




帯地を織る長岡さん



布地全体に「かすり紺」が入った「もろがすり総紺」の紬



渡源織物の職人さん

10月13日(火)からフィールドワークが始まりました。まずは、「長井紬」の実態調査として渡源織物を訪問し、「長井紬」の歴史や特徴を教えてくださいました。特に、「長井紬」の最大の特徴である「かすり紺」の技法は、経糸と緯糸の関係を実際に染めと織りの工程を拝見しながら説明していただきました。また、着物離れが進む中で「長井紬」はどのような販路開拓を行ってきたのか、組合の活動実績なども教えてくださいました。



織の工程を見て「かすり紺」を学ぶ



「かすり紺」の文様を出すために前もって糸を染める

山大学のフィールドワーク

「かすり紺」の技法は、「なごすり経紺」、「よがすり緯紺」どちらも併用しています。更に、「縮織」と言つて、撚りの強い糸を緯糸に用いて、織り上げたのちに温湯でもんで縮ませ、布面全体に「しぼ」を表した独特な手法も駆使しています。また、「かすり縮織」と言つて、経糸に工夫を凝らし、変化をつけて織る技法を用いることで、独特な艶を作り出す技法も得意とし、手の混んだ製品づくりに徹しています。図案のデザインは、細部の微調整や色のシミュレーションなどが多様に行われています。これからパソコンを導入して行っています。これまでの実績が認められ、令和元年には、第11回伝統的工芸品産業功労者等東北経済産業局長表彰を受賞しました。

長岡織物工房（西五十川）

長岡織物工房の創業は、昭和20年。現在2代目を継ぐ正幸さんの父である啓吉さんが、昭和16年から19年の米沢工業試験場長井指導所勤務の中で、「かすり紺」の技術を修得したことがきっかけです。創業以来、家族経営により「量より質」を重視した製品づくりを目指しています。昭和50年頃までは、座布団生地も織っていましたが、正幸さんが2年間程小千谷に修行に行き、その後、家業に従事したことをきっかけに「長井紬」の製造に絞った経営に転換しました。現在は、奥さんと2人で製造しています。

主な流通は、米沢の買継商を経由し、京都や東京の小売店で販売されますが、注文を受けてから製造する完全受注型で、完成まで約2か月以上かかる場合もあります。また、出荷する数量が予めわかるため「端切れ」はほとんど出ません。



「縮」と呼ばれる独特の技法で織られた紬



図案と紬を照らし合わせる長岡さん



長井紬の変遷を説明する渡邊さん